

毛の皮

911.3

八



亦未連向の交接るるに成る贈答の禮

を傳へて甲斐の竹良老人の持手より傳

言さぬに居ねる友人の交りも廣く寸

今中第の博覧會と鑑覽せむと杜

を名かり同を考へ對梅宇の門を叩き

初よりより東京府らの御友訪ら









新絹の足裾のたるのを反のうち

多く隔るゝ又とまへまへ

形より小鬘よりひんやりや

お茶より連うら星の小笠をぬ

磨きよ第の葉より寸産の船

歩りの葉より食のちま

袖より腕の中より月の左

ちくくはく妙よす

よみ玉の清いよりハ種本より

自分読る字のそくそのき

ちく玉の雪やうきもみる

離れ過るのそよちの味

お代のききよせりやうとそ

うちよ育たぬの種をよ

ほろりの調子よきぬ常るき

ゆあうらやまきえの年

節

糸

香

良

糸

節

良

香

節

糸

香

良

糸

節

良

香



草花の赤い花より可愛く

節

花より赤い花より可愛く

季

花より赤い花より可愛く

香

花より赤い花より可愛く

良

花より赤い花より可愛く

季

花より赤い花より可愛く

節

花より赤い花より可愛く

良

花より赤い花より可愛く

香

花より赤い花より可愛く

節

花より赤い花より可愛く

季

花より赤い花より可愛く

香

花より赤い花より可愛く

良

花より赤い花より可愛く

季

花より赤い花より可愛く

節



愛宕山眺望

昔おききもの入ゆるぬる細道

竹良

白帆の来り去り杳々

三士雄

山より玉の唐屋敷を歩くと

完盛

耳より玉の唐屋敷を歩くと

良

奥の山より先通へゆく月夜

雄

はるかに雲子のふりそよふ

盛

物よりゆくゆくゆくゆくゆく

良

ひさしくゆくゆくゆくゆくゆく

雄

寒うれいゆきふりそよふ

盛

おもしろいゆきふりそよふ

良

ゆきふりそよふいづれより

雄

市の人をかくるも同じ

盛

桜葉の新緑より別の日

良

草と花の結ぶより

雄



物よりいへば、何れも、

必らずいへば、八尋の氣路を

塞ぐれ、何れも、ふさふさなる口

お明のよあそ、君さる男の子

信より、来り、臣、雄、よ、す、き、こ、こ

市のえ、ま、と、歳、度、も、向、ふ

櫻、葉、の、新、費、た、り、別、の、月、り

茶、と、蘭、の、結、さ、り、す、は

良

堀

盛

良

雄

代

良

堀



掌への燈印 終るけ 立派なり

庭屋の島々の 斎庭一石

去るらん 己の 子所 此れなり

硯の海もや 玉 ちりり

五畧

咲ききり 老より 石を 枯らぬ

凍る 其れ 乾く なる

葉標の 夢 遠く 久あき

そよよ 此 写の 影の 隙

外 此 月 一番 此 月の 影

板 夢 だけ 遠く びや、あ

彼岸 會を つく 玉の 古き

葯 藉の 粉ハ あたり あり

夢の 水も ちり ちり なる

大 桶 少 多 大 地 け する

成

良

成

成

去 湖

竹 良

成 平

成 雅

良

採 玉

湖

平

雅

良



茶樹の葉はもとよりあつてゐる

平

そのゆゑに此等のものの隙

成雅

外は只此一番に此月の夜

良

板をたけ違ふひや、の

採玉

彼岸會をつとむる魚の古くきて

湖

薬蕨の粉ハおろりあなり

平

さし水もちのぬき川てふ歌合

雅

大桶少りたぢりきりす

良



|              |            |               |              |              |              |              |             |
|--------------|------------|---------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 花            | 湖          | 平             | 雅            | 良            | 花            | 平            | 湖           |
| 分おの損を人をも咄それ寸 | うら香とくも帷子の皺 | 花まくら森堂のうらも月も成 | 値いもききやー 終いの結 | 講いもき重達倉の招かれ々 | 忘りもきうら 終きもくら | るやのふ終いまでとむも暖 | おきもきうら 終いの結 |

|            |             |             |              |             |
|------------|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 良          | 月           | 外           | 山            | 竹           |
| くく 輝くもねの梅晴 | あつる月ハ輝の 右左り | つぎくもねの 終いもき | 一陶り馬士も終く 終風り | 木の芽もくく 白も終影 |
|            |             |             |              | 川や心の雪解北房満り  |



花の咲るの降る水り角田川

竹良

寒つきききききききききき

宇山

夏より国廟一就仕込

等裁

夏の長り長休

良

春より秋より月をぬき

山

西風の阿るをあらう

裁

門川平山の雪の北の雪

竹良

日ハくくと長き夕

永機

春角力金ききききききき

詢莞高

人ききききききききき

梅年

名月の光ききききききき

機

後の雲ききききききき

良



外風長ハ美いやうの 秋空

年

端々ハ又口利きやう

富

眼きいさちうき件おしる

良

酒さるうし酒さるうし

機

八橋のやうにさうさう

富

葬のきき生かへる

年

干蘭多のききゆき掛り

機

接付髪ハ羽輝きる

良

省のきき人冬のきき

年

何ききふきき

富

梅きき花きき阿少

良

梅きき花きき阿少

機

下署



王子と龍ひき

磯の香れりしも深き山葵代

竹良

障子と龍の阿くうき

精知

つねに魂をのこしお祈り

常盤

貸下預りし人のうらは人

完酌

清き水と月との能く

あ

飛りつゝりし紫雲の夕顔

良

お分ちきりしも松の松は

松

隙とゆやうの便約

室

後照りも夢の娘と君をぬき

良

情を伝ふるもあやう

あ

はつと船を千もうりへふり

星

はつと船を千もうりへふり

酌

精進をあらわしゆるす松葉

あ

名をうす終りしあはれの

良



金手く揺るく水重落しあ

路端くいさう寸 柏半

松栢の木れ宮の玉の生盛り

やうくやうくく水

夏妙も雛の解波より守ら玉

あうねい退屈く時

送言を守りく今も庫裡男

唐けハ光る玉も埋玉

迷うれハうろくく静くも

あうあうくねー夕立の金

ついでとよみとて金各の遠い道

既既くうあうい鉢も西側

五云も水あうくあうく

あうあうくとあれた雷あう

あうあうと月のあうたあう

知 臨 望 去 良 望 酌

知 臨 望 去 良 望 酌



先きうきしよふのれし緒

秋毎の焼ハあししのきうきし

四つ屋かたる敷のきうきし

三方の白きき鬼角しきうきし

丁度やわしききうきし

押替り付坂戸の神のきうきし

曳きかききうきし

良

臨

望

良

知

望

臨

對梅宇

問きけし梅葉付き来ぬ梅の玉

おしけけし梅の玉

潮氣あけし川き海苔のきけし

口きけしきうきし

月の色棚機あき格あし

肩きけしきうきし

竹良

乙良

青溪

雪最

十源

北山



明倫社員具表合

知子知やまふとてや下り垣

竹良

木匠のついで道草中

菊成

建てるに表す神もあきく

李増

足るやうに水とてあきく

菊成

昔の月影より物あきく

李増

言ひつゝ水とてあきく

良

勇我兄弟の墳を尋ね

凍つゝ水とてあきく

竹良

花もあきく水とてあきく

可郎

春草の生る水とてあきく

きのえ

温泉の生る水とてあきく

永松

秋の生る水とてあきく

若丸

新井の生る水とてあきく

菊



室の下初月泉邸集

海よりや来る寒き浴衣より

可節

海より来るのそよ風

竹良

霞引きたるもめねむれとて

永松

三人常よとて出でぬ

さう元

下弦よりくる初月

初月

ありけりて帰る時

孝

下果の泉邸集

第二情見合ふ車とすけ

兄とけふとてのそよ風のそよ月

竹良

あふとてのそよ風のそよ月

可節

附能ありとてのそよ風のそよ月

さう元

良きとてのそよ風のそよ月

良

美用の中とてのそよ風のそよ月

郎

本は筆のそよ風のそよ月

孝



室の下初月泉邸年

海よりや来る寒き浴衣をけ

可節

海より来るのそよ風

竹良

霞引をよもめ結むれそよ

永松

三人市よそそむるやうに

きつ元

下弦より月ありつるも旅の月

初月

ありけりて帰るは

孝

下果の歌

第二情宛金車とすけ

兄よけよ玉のつゆあふる月

竹良

歌よきそふ懐くる者

可節

解籠ありとふ派よれさけそ

きつ元

良き呼人ハ来る人おそ来る

良

美用の中より夏とぬ冬の来よ

節

本は葉のるは窓とすけ

孝







一戦うゝも返さずのまゝかき

杵

新とあらねどあれの水鏡の

良

鳥飾いふ水田面より青く

郎

新卯より葉子も庭をく

娘

我勝玉雪の阿雪ととりあ

良

今らゝ瘡も今も氣をくぬ

杵

去る時月い満月 柳のう

娘

ちつりぬる程 柳をくぬ

郎

葉火焚きより秋の深くと

杵

ちまたをぬる月を田の中

良

石をくぬるくさくさぬ道を

郎

あふく候ふ息のなとち

娘

日ろくともぬるまの雲

良

あふくまぬるく 柳を密

杵



初冬たきの可なりや唐より

西京 芥舎

とちんちんえれおるや唐の梅

百可

そわいそや高きしと折る葉ふり

猪雲

田樂もすそもつと寸もつと

大坂

潮水

たつと引とあき少や 初より

南嶺

初冬やうけきるのよ受てん

文鳳

あーあーあー余室の人通り

流英

ささ水あつと岩跡すわね

伊豫

青石

雪梅や能のうへとむのうへ

其哉

雪のつ利白くつと梅の雪

阿波

思風

おまわりや雪の水桶の歳

抱清

出陣のしそれと居れり夏の月

宇崔

雪のつとるのしそれと居れり

芳桂

雪のつとるのしそれと居れり

陸路

周集

松田のしそれのしそれと居れり

土佐

松塘



杉並をさうの趣水付るより 五首

枝先より水柱さうより 梅 長門 梅窓

鏡もち 親子の 笑も 移る危 周防 自唱

神より寸時や 何と云へ磯ふり 出雲 曲川

昔と氣もつらぬ日の 初音うね 兼濃 竹菰

行人の寸時も 空を 提へ 登座

昔もといふ人志す 雪のそら 尾張 祖康

的阿けと 探つれぬ 夕ふり 杉霞

とや 昔とあつたつた 水

唐笠より 杉の 葉 三河 蓮平

うねり 持し 水は 味 石芝

水月や がいり 水あや 斗大

是又の 水あや 水あや 青溪

昔とや 水あや 水あや 十歌

空と 水あや 水あや 清氏

水あや 水あや 水あや 雲嶺



唐の那工より以て其の風 秋 湖

白雲の空より其の玉の風 此 山

山にや、其の庭より其の山 貝 乙 彦

花の葉より其の山 何 連 水

櫻の葉より其の山 相 故 崖

雪の葉より其の山 延 年

多 現 年 上 総 来 高

水より其の山 樂 品

るの唐より其の山 下 地 可 市

水より其の山 唯 一

初より其の山 年 心

数より其の山 常 陸 神 宮

花より其の山 磐 城 野 場

水より其の山 柳 寺

角より其の山 芳 堀

沈玉の山より其の山 陸 前 北 山



若ふよおのちとるくく 後の玉 青直

傘うきりしとそふや心姓 羽希 唇風

天地の事い仰きく 時おろく 藤湧

ふつ阿ふはよ解ふん 阿うれん 羽後 素心

眼のあふぬおふゆきめくおふき 二葉

追ふ位をさゆてし 以守梅きん 吟風

清く守むきんや 夢雲はる水 江指 一鼎

行ふやきくきり 雪と 水 對凡

掛鯛や糸をきく 那光うき 應井

同く氣あふはゆや 和雪 越後 雪浪

まのりよのうぬ 綱ふきき 雪江

きふおふうき 佐渡 奇剛

くつぬけはるや 赤きん 越中 芹成

葉や事なふの けり 露心

秋はきく 入れぬ 柳やうき 加賀 雪氣

山里や 雪きり 出て 北月 文 雲



浮きや油のくちねね招の碇 信濃 月窓

清々々々年のかくく照くくききく 翠堂

其のあや月のあきもあき 金石

一ひひひひひひひひひ や老

々々々々々々々々々々々々々 上毛 市流

竹の根よりいともきぬ 素古

常々常々常々常々常々常々 牧雄

対るたうきやあきと一さう 下毛 瓢仙

雲も氷もあき 耕子

袴着や金もあき 有柳

能くや竹も柳もあき 角土

名月や河原の中は 幻左

一ひひ馬よりいともきぬ 横濱 友昇

清濁やきりり中は 奇水

初々々のひひひひひ 東京 詢菟齋

常々々のききききき 等哉



例の本ヨ移取此杜のるねーハ

在版

何喰くおときけ玉を時節

尋香

かりあふう移取う梅の玉

太年

初をり陽氣と向て夜明う那

宇山

宵のる一先と移く初ーくれ

永機

移の香や一種ふ移のるる

精古

一かふさきうおとゆー梅の玉

完成

数へのるる海きゆふへる

詩竹

移くや掌とささるる起るはく

五雀

山吹やも移るふれハま那枝

菊成

春るやるる本さけのまのさ

茂翠

おのつらう移うつさぬ後まら

山月

数へのるさありたきあゝ取哉

善敵

空子のりさうふるさの花の窓

馬耳

空水もささるる玉の深白り

松雄

るさ待る本もあふり百日紅

琴糸



|            |    |
|------------|----|
| 以阿知也所の書よる  | 精之 |
| 常や柳すゆ来る    | 月彦 |
| さ波の海さみゆる   | 完鷗 |
| 千代をゆりしる来る  | 常笠 |
| ゆねや玉や夕なれつる | 香奇 |
| さあしをねのゆりしる | 月杵 |
| 来るゆりしる心まぬ  | 土雄 |

|              |    |
|--------------|----|
| 郷食應も時の物を架う   | 書芸 |
| 門松や袖をうるも心持と来 | 南海 |
| 当ふはふきりしるや    | 松手 |
| 常やゆりしる時さる    | 杉久 |
| 飛りり者ちりきり     | 花園 |
| 来るの障目        | 恒池 |
| 給う四よるして置たま   | 白瑞 |



あつ月と雪とをとおもふ

一陽

福引や雪のまゝ出付相まの

斗月

堀越よよの味の梅の玉

子団

雪みまのの粒さ付や一重垣

寸松

行きふたふた酒を乾上じ

白隆

苗代よ移る雪一さの山

玉瓶

雪おとさきりさるるなり

赤一

雪やちと細く枝移る

金水

松のけしきよけしき

平作

月と梅古き氣をのち

左一

庭の雪のまゝさるる

梅子

酒をうめをさるる

五柳

おくや梅のちと度

芳路

またれい親よ

茂里

初雪も咲きさるる

朱雪

川越せとちとや

池邊



梅の香や雪より清きも　まてお人  
梅ちよや朝のゆきこころ　お人  
晴きつて空の廣さや　梅の花  
梅の恋月よりくもり　あはれ  
雪がふりしるすも　あはれ  
雪を家よりさるるも　あはれの松  
雪ふるもや海も初日の　あはれ  
雪ふるもや雪も　あはれ

雪　松　梅　竹　左　半  
遊　根　石　片　邊　拙

愛つたり梅の影を日向う那  
 越えや保善八分の子殿のけ  
 身は受ふべき事とされぬう那  
 柳水のおとせし出たり新のる  
 病もあつてもあるや尾の梅雪春  
 ぬる山あつてもあつたりうちの胡蝶は  
 花も負ふた人もあつたり梅雪  
 黄ふたりあつたりあつたり梅雪

九歳  
 奈加子



岩根

仙城ハミミ紙ミミミ紙ミミミ

永松

旅中

るのハミミ紙ミミミ紙ミミミ

ミミミ

靖園神社

敬ミミミ紙ミミミ紙ミミミ

可節

ミミミ紙ミミミ紙ミミミ

竹良

ミミミ紙ミミミ紙ミミミ

全





